捕鯨を通して学ぶ 伝統と生命を尊ぶ生き方

大和大学で特別授業

日本鯨類研究所・産経新聞社共同企画
石川梵氏、佐々木正明氏が講師

1月5日、大和大学（大阪府吹田市）にて特別授業「自然との共生 インドネシアの伝統捕鯨をとらえたドキュメンタリー作品『くじらびと』の現場からの報告」（日本鯨類研究所・産経新聞社企画）が行われた。インドネシアの伝統捕鯨を長年取材し、ドキュメンタリー映画『くじらびと』を完成させた映画監督・写真家の石川梵氏と同大社会学部教授の佐々木正明氏が講師を務め、捕鯨や鯨食文化の大切さを伝えたもの。現場を知る石川氏の言葉に、同大学1年生の男女200人が熱心に耳を傾けた。

鯨と生きる伝統を学生たちに伝える

日本から約5000キロ。インドネシア・ラマレラ村では、400年続く伝統捕鯨で生計を立てる。石川氏は1990年代から写真家として村を取材。昨年はクラウドファンディングで制作費を調達したドキュメンタリー映画『くじらびと』が公開を迎え、大きな感動を呼んだ。特別授業ではこの作品を入り口に、捕鯨や鯨食文化について二人の講師が話し合い、学生たちは興味津々の表情で聞き入った。

石川氏と佐々木氏は、ラマレラ村は、自然の恵みに感謝を捧げ、和と言い伝えを重んじる社会であることを紹介。鯨を年10頭捕れれば村全体の生計が立ち、命をかけて鯨に立ち向かうラマファ（銛打ち）は最も尊敬されているという。作中では伝統捕鯨の場面だけでなく、鯨肉を村に行き渡るように分配する場面や、海で死んだ人を弔う行事など村の生活そのものが描かれる。その姿はかつての日本の漁村を思わせる。

象徴的な場面のひとつが、村に起こったある問題を機に、皆で船を作り替えるシーンだ。石川氏が「船には先祖の魂が宿るとされている。口承に従った工法で、協力して船を作ることで一体感が高まる」と説明。佐々木氏は「しきたりが村の生活様式に結びついている。だからこそ今日まで持続的な生活を営んでこられたのですね」と応じた。

「くじらびと」を鑑賞した学生からの感想も。鯨と人間が命がけで戦う映像に、自然の危険さや人間の恐ろしさを感じながらも「鯨と人は共に生きている」「村人は鯨を心から尊敬しているのではないか」という読み解きや、「祈りや言い伝えが生活に根付いている」「日本文化と似ている」などの声が寄せられた。そして「今の生活は、自然から何かを奪って成り立っていることを忘れてはならないと感じた」という意見を受けて、「ラストシーンの演出は、まさに生きることの悲しさ、命の連鎖を伝えようとした」（石川氏）、「捕鯨を通して、人類のあり方について見直すことができるのでは」（佐々木氏）と、特別授業は深い議論に進んでいった。

写真家・映画監督
石川 梵氏

いしかわ・ぼん／写真家として30年間にわたり、「大地と祈り」をテーマに世界60カ国以上で撮影。その経験を生かし、2015年からドキュメンタリー映画監督、撮影監督としても活動。映画『世界でいちばん美しい村』、写真集『海人』『The Days After 東日本大震災の記憶』ほか作品多数。

大和大学 社会学部教授
佐々木 正明氏

ささき・まさあき／ジャーナリスト、大和大学社会学部教授。元産経新聞記者。新聞社時代には大阪社会部、モスクワ支局長、リオデジャネイロ支局長、運動部次長、社会部次長を歴任。2021年春から現職。著書に『恐怖の環境テロリスト』『シー・シェパードの正体』がある。

ラマレラの人々に学ぶ「生きる意味」

四方を海に囲まれた日本では、古来、鯨は重要な食料だった。歴史をさかのぼると、5000年前、縄文時代から鯨食の証拠が残されている。史料にも高級料理として献立が残され、各地の郷土料理にも、鯨肉を用いた独自の食文化が伝わる。佐々木氏はそうした来歴を紹介し「食料資源というだけでなく、骨や脂まで余さず利用できる貴重な資源として、日本人は鯨を余すことなく使ってきた」と解説。日本文化と切っても切り離せないものであることを若い世代に伝えた。

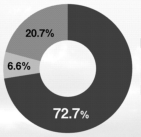
一方、近年は欧米や豪州での反捕鯨運動を契機に規制強化が続き、日本の食卓から鯨が遠ざかっているのも事実だ。将来的には捕獲可能量の見直しによって、漁獲量の回復も想定できる中、佐々木氏は「食文化を守るためにも、鯨肉の消費量を維持していくことが喫緊の課題になっている」と危機感をにじませた。これを聞いた石川氏は、反捕鯨団体がラマレラ村に、網を使った漁を持ち込んだ出来事を紹介。網漁は効率的に魚が取れるが、夜間に行うため、昼間の鯨漁には出られない。小さな魚をいくら取っても、鯨を捕らないと村の全員は食べられなくなってしまう。「鯨漁をやめることは生活全体を変えることになるのです。大きな転機にあたって村人たちは自ら話し合い、鯨漁の時期は網漁をやめ、伝統的な生活を守ることにしたのです」と、村人の英智をたたえた。

歴史を受け継ぐ重要性

授業前後にはアンケートも実施。授業前には伝統文化としての捕鯨の継承に理解を示す学生もいる一方で、「鯨の歴史について高校まで学ぶ機会がなかった」「私の祖父母の時代には学校給食で出されたことは知っている」「捕鯨禁止の理由も、継承することの利点も分からないので何とも言えない」などの回答が目立った。

特別授業を終えてのアンケートでは、「縄文時代以来の歴史や、食べられない部分まで利用していたことを初めて知った」という感想のほか、「伝統文化としての捕鯨は禁止すべきではない」「生態系が崩れない範囲の捕鯨は問題がない」との意見が多くみられた。また他国の批判に対しても「正しい知識を学んで、今後どうすべきか考えたい」「捕鯨の誤解を解くために、ニュースやSNSでもっと事実を広げていくことが重要」と、次世代の担い手として頼もしい意気込みの言葉もあった。

日本は捕鯨を継続すべきか?
（授業後：回答198件）



授賞式を終え、学生たちと

『くじらびと』が「2021年度JSC賞」を受賞

特別授業の終了後には、『くじらびと』で石川氏が受賞した「2021年度JSC賞」の授賞式も行われた。日本映画撮影監督協会（JSC）が授与するもので、劇場用映画以外のドキュメンタリー作品などの中から、特に成果を挙げた撮影監督を選出する。400年続く伝統捕鯨の村を生き生きとした映像に収め、人が生きる原点まで感じさせる作品として評価されたという。

オンラインで東京の会場とつないでスピーチした石川氏は「日本でも行われてきた伝統的な鯨漁を記録として残すことができた」と達成感を語った。佐々木教授もあいさつに立ち、祝福の言葉とともに、最後は学生へ語りかけるように「長期間の撮影では鯨が現れない日が何日も続いた上で、素晴らしい作品になった。これは人生において何かを成し遂げる時の縮図であり、教師として皆に『決して諦めないで』と言いたい」と熱くしめくくった。

国内外で絶賛されるドキュメンタリー映画
『くじらびと』

巨大なマッコウクジラを相手に、小さな船と銛を頼りに立ち向かう人々を追った本格ドキュメンタリー。海の資源を持続可能な範囲で使いながら、伝統や信仰を守ろうとする村人の生活すべてに密着。ドローン撮影など最新の手法も導入して迫力ある映像でまとめた。

2021年9月の公開以降、グアム国際映画祭「最優秀ドキュメンタリー賞」や日本映画撮影監督協会「JSC賞」受賞、キネマ旬報ベストテン第2位（文化映画）にも選ばれるなど、高い評価を得ている。

『くじらびと』公式サイト
https://lastwhaler.com/

くじら総合サイト「くじらタウン」
https://www.kujira-town.jp

指定鯨鯨類科学調査法人/一般財団法人 日本鯨類研究所
https://www.icrwhale.org/

〈企画・制作〉産経新聞社メディア営業局 PR